



巻頭特別企画

岩清水 梓 東京ヴェルディクラブアンバサダーインタビュー 「コツコツと積み重ねることの 大切さを伝えたい」

TOKYO FA's Pick Up

ペスカドーラ町田
クラブハウス「HUMAN HUB COMPLEX INOVA」

GAME REPORT

2026東京国際ユーススポーツ大会(サッカー)
第31回 東京都サッカートーナメント
第80回 国民スポーツ大会関東ブロック大会
JFAバーモントカップ
第36回 全日本U-12フットサル選手権大会

SPECIAL INTERVIEW

荒木友輔サッカー国際審判員

REPORT

フットサル審判育成事業
「ネクストジェネレーション研修会」

「サッカーライフ」

立川アスレティックFC チームドクター伊藤勝敏さん

私たちは 東京都サッカー協会を 応援しています。

初声町和田長浜太陽光発電設備



神奈川県初声町和田(和田長浜海岸側)
2021年4月
取得名義:株式会社スカイ・ランド
(日本水資源開発株式会社関連会社)

人を潤し自然を守る
ECO UP PROJECT

 日本水資源開発株式会社

代表取締役 松永 利明

《東京営業所》

〒142-0063 東京都品川区荏原3丁目2番6号
TEL 03-3477-2477 FAX 03-3477-7661



2026年1月末に完成したペスカドーラのクラブハウス『HUMAN HUB COMPLEX INOVA』

「従来のクラブハウスとは一線を画す」 ペスカドーラ町田が描く、地域とともに育つ 新たなスポーツクラブの形

カフェ、トレーニングジム、児童発達支援・放課後等デイサービス、さらには“推し活”を楽しめるプリントラボまで。ペスカドーラ町田の『HUMAN HUB COMPLEX INOVA』は、従来のスポーツクラブのクラブハウスという枠には収まらない施設だ。その根底にあるのは、「地域に何を還元できるか」という問い。Fリーグ屈指の観客動員を誇るクラブは、なぜこれほど地域に開かれた拠点をつくったのか。関野淳太代表取締役社長が描く「競技性と社会性の両面でトップ」を目指すクラブの未来に迫った。

「地域に何を還元できるか」から始まったクラブハウス構想

Fリーグ屈指の観客動員を誇るペスカドーラ町田のホームアリーナ・町田市立総合体育館から徒歩約3分。クラブハウス『HUMAN HUB COMPLEX INOVA』は、ホームアリーナの“お膝元”とも言える距離に君臨している。

関野淳太代表取締役社長が24年末から構想を温めてきたクラブハウスは、完成まで足掛け約2年。地元・町田の方々の協力を得る形で待望の拠点完成を実現させて「従来のスポーツクラブのクラブハウスとは一線を画している」と胸を張る。

コンセプトの出発点は「町田市にホームタウンを構えるFリーグクラブとして、地元へ何を還元できるか」。まずは方向性を定めるために、地元の方々の声をヒアリングした結果、「地域の方々といかに接点を作るか」という理念の下、クラブのオフィスの機能だけにとどまらないクラブハウスを造ることに決めたという。

もともとペスカドーラは今後のクラブの発展性に鑑み、「すべての子どもたちにスポーツをする機会を提供する」という理念を掲げた『PESCA VISION 2037』を計画。「競技性と社会性の両面でトップのスポーツクラブを目指そうとの気概がある」ペスカドーラの存在価値について力説する。

「Fリーグでコンスタントに優勝し、アジアの大会に出ていくことなどが我々の本業ではありますが、それがすべてではありません。地域貢献、社会貢献の観点からスポーツクラブの責任をどう果たしていくか。自分自身はこの両面でできることを真剣に考えています」

カフェとAIジムで生まれる選手と地域の新たな接点

地域の方々と接点を持つことに寄与している施設が、本場ブラジルの味と居心地を再現したコンセプトカフェ『Quebom!』（キボン）や、心身を鍛えられるトレーニングジム『PITIN conditioning』（ピットイン）だ。

前者の『Quebom!』は、ペスカドーラがフットサルクラブであることを知らない近隣住民も立ち寄るほど、街に馴染んでいる。看板メニューはブラジルの代表的な豆と肉の煮込み料理・フェイジョアード。ペスカドーラのアウェイゲームの際には、店内でパブリックビューイングも開催している。

一方、『PITIN conditioning』の最大のセールスポイントは、AI姿勢解析アプリ『shintai』の無料利用（ジム会員限定）。昨年大阪万博で出展したAI姿勢解析アプリ『shintai』を導入する世界1号店として『PITIN conditioning』が選ばれたため、希少価値も高い。「科学で、身体を整える。」をコンセプトに、『shintai』によるAI姿勢解析のデータをもとに、表面化した問題点を改善していくアプローチで、老若男女を問わず幅広いユーザーが利用している。

なお、『Quebom!』も『PITIN conditioning』も、営業時間内にはペスカドーラの選手たちが利用することも。タイミングよく出会えば、選手たちにサインをもらったり、一緒に記念撮影をしたりすることも可能だ。



本場ブラジルの味と居心地を再現したコンセプトカフェ『Quebom!』



トレーニングジム『PITIN conditioning』

サッカー療育から“推し活”までクラブが生み出す新たな価値

クラブの社会的価値を高めることに寄与しているのが、児童発達支援や放課後等デイサービスを行っている『TAFF』（タフ）の併設だ。「サッカー療育で広げる 子どもの未来と可能性」をコンセプトに、子どもたちがサッカーを通して「体を動かす楽しさ」や「仲間と関わる喜び」を感じながら、思い通りにいかない場面にも少しずつ向き合い、心の強さやタフさを育めるよう日々サポートしているという。『TAFF』での活動を通して自己肯定感を高める子どもたちが増加。ペスカドーラのホームゲーム全試合を観戦するようになった“ペスカ推し”もいるという。



児童発達支援や放課後等デイサービス『TAFF』

現在のペスカドーラは4季連続でFリーグ観客動員トップを記録するほどの人気クラブ。その中でファンエンゲージメントを高めることに寄与している施設が『PESCADOLA PRINT Lab.』だ。

エプソン社の最新プリント技術を誰もが体験できるクリエイティブ拠点では、クラブ公式デザインを使ったグッズから、ユーザーが所有する画像を活用したオリジナル作品まで制作できる。“推し活ブーム”を形にできる聖地と言っている。

今季のホームゲームでは、MVP選出選手の限定グッズを試合後に『PESCADOLA PRINT Lab.』で制作し、その場で持ち帰ることができるサービスもスタート。ホームアリーナとクラブハウスが隣接しているメリットを最大限に活かし、ホームゲーム来場者を楽しませる工夫に余念がない。

町田から始める新たな挑戦

『PESCA VISION 2037』の実現に向けて、28年には完全プロ化も見据える。もちろん競技性の発展だけではなく、社会性の面でも、ペスカドーラは新たな取り組みに着手している。

その代表例が、ホームゲーム来場時に配布しているマッチデープログラム（MDP）を任意で回収し、再生紙を使って今後のMDPを制作する活動だ。この9月には町田市と提携し、古紙を再生紙にアップサイクルするペスカドーラ発信の紙循環事業『MACHIDAペパルン プロジェクト』がスタートするという。「雇用創出の機会にもつながる持続可能な事業にしていきたい」と言葉に力を込める。

競技性と社会性。その両面を軸に、町田市のスポーツクラブとしての価値を創造する。その拠点がペスカドーラのクラブハウス『HUMAN HUB COMPLEX INOVA』だ。

基本情報

「HUMAN HUB COMPLEX INOVA」
東京都町田市南成瀬4-19-3
（JR横浜線「成瀬駅」から徒歩10分）
<https://pescadola-inova.com/>



岩清水 梓 東京ヴェルディクラブアンバサダーインタビュー

「コツコツと積み重ねることの大切さを」

163センチのセンターバックとして世界に上り詰め、2026年5月までプレーした岩清水梓さん。出産を経て現役復帰を果たし、39歳まで選手として活躍し、女子サッカー選手の新たな道を切り拓いてきた。その原動力は、「サッカーが好き」という変わらぬ思い。現在は東京ヴェルディ株式会社のクラブアンバサダーとして活動する岩清水さんに、これまでのサッカー人生と、これから描く未来について話を聞いた。

ひたむきにピッチを駆け抜けてきた26年間を振り返る

——26年間の現役生活、本当にお疲れさまでした。引退後はクラブアンバサダーに就任されましたが、現在の心境をお聞かせください。

クラブアンバサダーに就任できたことを、とても光栄に思っています。企業訪問や行政へのごあいさつ、地域イベントへの参加などが主な活動になると考えています。シーズン中、選手はコンディション調整や体のケアもあり、ご支援や応援をしてくださる皆さんと直接触れ合う機会を多くすることは難しい。だからこそ、その間をつなぐ存在として、クラブと地域、そしてファン・サポーターの皆さんを結ぶ役割を果たしていきたいと思っています。

——ピッチを離れてまだそれほど時間は経っていませんが、引退後の心境はいかがですか。

日に日に『選手を辞めたんだな』という実感が湧いてきています(笑)。小学1年生からサッカーを始めて、一度も離れたことがなかったの、毎日ボールを蹴ることが当たり前だった生活が少しずつ変わっていくことに、寂しさもありますし、不安もあります。私が引退を決めたのは、サッカーが嫌いになったからではありません。むしろ、今でも大好きです。ただ、自分が思い描くトップレベルのプレーを表現できなくなったと感じたことが、決断の理由でした。今でも、いつもボールを蹴りたいという気持ちは変わりません。

——14歳で国内リーグデビューを果たしました。当時の自分に声をかけるとしたら、どんな言葉を伝えますか。

『続けることの大切さ』を伝えたいですね。辞めたいと思ったことは何度もありました。そのたびに父に叱られました。今振り返ると感謝しかありません。『続けていれば、その先には素晴らしい仲間との出会いや、想像もできないような経験が待っているよ』と伝えたいです。



お子さんとの入場を叶えた瞬間

ワールドカップの経験で得た諦めない気持ち

——長い競技生活の中で、最も印象に残っている出来事を教えてください。

やはり、日本女子代表として出場したFIFA女子ワールドカップドイツ大会(2011年)での優勝です。あの経験に勝るものはありません。今から15年前になりますが、決勝は本当に紙一重の戦いでした。最後はPK戦で勝利しましたが、もし負けていたら皆さんの記憶に違った形で残っていたかもしれません。当時は東日本大震災が発生した直後で、『日本に元気を勇気を届けたい』『サッカーを通じて何かを伝えたい』という思いを、チーム全員が強く持っていました。アメリカに先制されても追いつき、延長戦でも追いつくことができたのは、震災で

大変な思いをされている方々がいる中で、私たちは日本を代表して戦わせてもらっているという責任感があったからです。だからこそ、『絶対に諦めてはいけない』という気持ちを最後まで持ち続けることができました。

——アメリカ戦の決定機で、岩清水さんが身を挺してゴールを防いだプレーは、今も多くの人の印象に残っています。

ありがとうございます。でも、あのプレーもチームのみんながいたからこそ評価していただけたものだと思います(笑)。私は退場になってしまい、その後はスタジアムの通路で試合を見ていました。もう祈ることしかできなくて、大泣きしていましたね。PK戦が終わって優勝が決まった瞬間は、すぐにピッチへ駆け出しました。大会を通して『日本に明るいニュースを届けよう』と話し続けてきたので、それを実現できたことが本当にうれしかったです。岩手に帰省した際にも、多くの方から『ありがとう』と声を掛けていただき、本当にありがとうございました。

——優勝をきっかけに、日本女子代表(なでしこジャパン)に憧れてサッカーを始めた子どもたちも増えたのではないのでしょうか。

今の代表選手の中には、なでしこジャパンを見てサッカーを始めたという選手がたくさんいます。そう考えると、自分たちの優勝が次の世代へとつながり、日本女子サッカーにとって大きなターニングポイントの一つになったのではないかと思います。

——以前、この広報誌(2012年3月号)では、『女の子が中学校でもサッカーを続けられる環境を整えたい』と話されていました。現在の普及状況をどのように感じていますか。

女子チームは以前より増えましたし、WEリーグやなでしこリーグでも、アカデミーや育成組織の整備が進んでいます。少しずつですが、女子サッカーの裾野は確実に広がっていると感じています。ただ、チームを一つ立ち上げることは簡単ではありません。セレクションで選考から外れた子どもたちが、それでもサッカーを楽しみながら続けられる『第三の居場所』のような環境があればいいなと思っています。より多くの子どもたちがサッカーを楽しめる環境づくりは、これから大切な課題の一つだと思います。



©TOKYO VERDY

キャプテンを務め初めてのリーグ優勝(2015年)

伝えたい」



たので、『きっと大丈夫』という気持ちで思い切って蹴ることができました。決めることができて、本当に良かったです。ただ、引退試合だから特別という思いはありませんでした。私にとって一番大切だったのは、チームが勝つことです。最後に勝利で終われたことが、何よりもうれしかったですね。



WEリーグ初得点の瞬間

——奇しくも、それがWEリーグ初ゴールとなりました。

実は、それだけが少し心残りだったので(笑)、最後に決めることができて本当に良かったです。

そっと背中を押せる存在でありたい

——冒頭でも少し触れましたが、今後の活動や目標について教えてください。

まだ具体的にお話しできないこともあります。シーズンが始まれば、いろいろなことが見えてくると思っています。今は、選手時代には経験できなかった立場で、WEリーグやスポンサーの皆さんとの関わり方など、新しいことを学んでいる日々です。クラブアンバサダーとして、ヴェルディとベレーザが、これまで以上に地域の皆さんやファン・サポーターの皆さんに愛され、応援していただけるクラブになれるよう力を尽くしていきたいと思っています。私は指導者ではないので、技術的な指導はできません。でも、選手たちが悩んだときに相談できる存在、そっと背中を押せる存在でありたいと思っています。ヴェルディもベレーザも練習を見に行くことがありますし、何か力になれることがあれば積極的に関わっていききたいです。

——改めて、日本女子サッカーの未来への思いを聞かせてください。

日本人選手の良さは、技術の高さや組織力、連動したプレーにあると思います。そうした長所は、これからも大切に伸ばしていったほしいですね。世界との差がすごく大きいのかと言われるれば、私は決してそうは思いません。もう一度、世界大会でメダルを獲得し、世界の頂点を争う舞台で戦い続けることは十分に可能だと思っています。

——最後に、東京のサッカーガールズへメッセージをお願いします。

まずは、自分自身の目標を持って取り組んでほしいと思います。一生懸命頑張っている姿は、必ず誰かが見てくれています。自分の好きなことに真面目に向き合い、毎日コツコツと努力を積み重ねること。その姿勢が、きっと誰かの心を動かします。そして、その積み重ねの先には、自分でも想像していなかった景色が待っているはずです。真面目に、誠実に、努力を続けること。私はその大切さをこれからも伝えていきたいと思っています。

世界との差は決して大きくない

——日テレ・東京ヴェルディベレーザやなでしこジャパンで学んだことを教えてください。

『継続は力なり』という言葉がありますが、まさに私のサッカー人生そのものだと感じています。NTVメニーナに入団した頃は、一番下手な選手で『大変なチームに入ってしまったな』『本当にやっていけるのかな』という不安ばかりでした。それでも、自分なりに必死に食らいつき、技術の高い選手たちと毎日プレーすることで少しずつ成長することができました。あの環境が、自分を大きく成長させてくれたと思います。当時はまだプロリーグもなく、メニーナに入ればベレーザを目指し、ベレーザに入れば日本代表を目指すという環境がありました。そんな環境に身を置けたからこそ、コツコツと努力を積み重ねることができました。毎日が公式戦のような緊張感のある練習でした。目の前の1対1やミニゲームにどう勝つかを真剣に考え、一つひとつ積み重ねてきたことが、日本代表への道につながったのだと思います。毎日の積み重ねは、その時には目に見える成果がなくても、必ず自分の力になります。だからこそ、コツコツと努力を積み重ねることの大切さを、自分自身の経験を通して伝えていきたいと思っています。

——2020年に第一子を出産し、2023年3月にはお子さんを抱っこしてピッチに立つ姿が大きな話題となりました。ママさんWEリーガーとしての挑戦を振り返ってください。

妊娠した時は、一度は引退も考えました。でも、『続けよう』と決めた瞬間から、チャレンジする気持ちが強くなりました。ちょうど、なでしこリーグからWEリーグへ移行する時期でもあり、当時の岡島喜久子チェアから『女子サッカーのプロリーグができる上で、あなたの存在は本当に大切だから頑張ってね』と言葉を掛けていただきました。その言葉を聞いた時、自分だけの目標ではなく、多くの人の思いや夢も背負っていることを改めて感じました。だからこそ、『辞めます』とは安易には言えませんでした。もちろん最終的に続けると決めたのは自分ですが、『自分一人の挑戦ではない』という思いが、リハビリを続ける大きな支えになりました。また、結婚・出産を経ても第一線でプレーを続けた宮本ともみさん(現INAC神戸レオネッサ監督)の存在も、私に勇気を与えてくれました。

——現役ラストマッチとなった5月16日のリーグ最終節では、キャプテンマークを巻き、PKによるWEリーグ初ゴールが決勝点となりました。まるでドラマのような幕切れでした。

PKは、眞城美春選手が『お願いします』と託してくれました。ベンチを見ると楠瀬直木監督も『お前が蹴るんだ』という表情で背中を押してくれて、『もう自分が決めるしかない』と腹をくくりました。クラシエカップ決勝(4月12日)のPK戦での少し苦い経験もあり、それ以来、PK練習は定期的に続けていました(笑)。練習を積み重ねてきたという自信もあっ



試合後にお子さんと記念写真

PROFILE

岩清水 梓(いわしみず・あずさ)

1986年、岩手県出身。大沼サッカースポーツ少年団でサッカーを始め、2000年にNTVメニーナへ加入。2003年に日テレ・ベレーザで国内リーグデビューを果たした。2006年に日本女子代表へ初選出。2011年のFIFA女子ワールドカップでは主力として日本初優勝に貢献し、翌2012年のロンドンオリンピックでは銀メダルを獲得した。国内ではリーグ優勝を11度経験し、2006年から13年連続でベストイレブンに選出。2020年に第1子を出産後も現役を続けた。2026年5月16日のリーグ最終節をもって現役を引退。現在は東京ヴェルディ株式会社クラブアンバサダーとして活動している。



FC東京がPK戦を制し初優勝

2026 東京国際ユーススポーツ大会 (サッカー)



開会式後にサンパウロFCと記念撮影をする東京ヴェルディ



ジャカルタとユニフォーム交換をする東京都トレセン



ニューサウスウェールズとサッカー盤をする東京都中体連

決勝は、ソウルとFC東京による熱戦となった。FC東京が開始早々に先制するも、ソウルも終盤に追いつき、試合はPK戦へ。国際大会ならではの緊張感の中、FC東京が最後まで集中力を切らさず初優勝を飾った。

なお本年度より、「東京国際ユーススポーツ大会 (サッカー)」に大会名とエンブレム等が変更された。

主 催：(公財) 東京都スポーツ文化事業団、(公財) 東京都サッカー協会

後 援：(公財) 日本サッカー協会、(公財) 日本プロサッカーリーグ、(株)Jヴィレッジ、福島県、福島県教育委員会、広野町、楡葉町

日 程：2026年5月4日～6日

海外チームとの熱戦を糧に



優勝したFC東京

決勝は、ソウルとFC東京が対戦した。FC東京はこの大会にあわせて「FC東京U-15深川」と「FC東京U-15むさし」の合同チームで挑んだ。国際大会の頂点を懸けた一戦は、立ち上がりから集中力の高い攻防となった。

FC東京は開始2分、左サイドからMF鈴木竣也がクロスを入れると、FW井出祥太郎が頭で合わせて先制。早い時間帯に試合を動かし、その後も前線からの守備と素早い切り替えを生かして、積極的に追加点を狙った。一方のソウルも粘り強く対応し、時間の経過とともに攻撃の圧力を高めていく。FC東京は最後まで規律ある守備で対応したが、後半終了間際にソウルが同点ゴール。試合は1-1のままPK戦へ進んだ。緊張感の高まる中、FC東京はGK長谷川史叡を中心に落ち着いた対応を見せ、PK戦を2-0で制して初優勝を飾った。海外チームとの真剣勝負を通じ、選手たちは技術だけでなく、試合運びや精神面でも貴重な経験を重ねた。勝敗を超えて、次代を担う選手たちの成長と、国際交流の意義が感じられる決勝となった。

順位表

優勝	FC東京	7位	東京ヴェルディ
準優勝	ソウル	8位	宮城県トレセン
3位	サンパウロFC (サンパウロ)	9位	岩手県トレセン
4位	ジャカルタ	10位	ニューサウスウェールズ
5位	茨城県トレセン	11位	福島県トレセン
6位	東京都トレセン	12位	東京都中体連
フェアプレー賞	FC東京		

世田谷サッカー協会や中体連など多くの方の協力によって大会は運営されています。2008年から2026年までに16回開催しており、今回は駒沢オリンピック公園で開催が始まった2009年(第2回)大会より携わる世田谷サッカー協会をご紹介します。



世田谷協会スタッフ

協力いただくこととなったきっかけや、長年携わってきて感じる大会や選手の雰囲気の変化を伺いました。

国際ユース大会で得た学びを、次世代の大会運営へ

きっかけは、2009年に駒沢公園で実施する事となり大会運営の協力依頼を頂いたことでした。国際大会の運営に携わる事は運営の勉強になり大きな財産になると依頼をお受け致しました。大会運営に中学生も携わり、同年代のプレーの観戦にも多くの子ども達が訪れていました。2022年(第12回)にJヴィレッジに会場が移動した事は雰囲気を変えたと思います。サッカーの聖地であり復興の拠点となった地での運営は嬉しく感慨深いものです。規模の縮小があり会場に観客の子どもたちが少ないと感じましたが、国際ユース大会運営で学んだ事は私共協会の運営に多くの良い影響を与え、世田谷区の中学生の大会運営にも生かしております。



双眼鏡も使用しながら記録業務を行う様子



得点板操作とボールパーソンを兼務で担当

タイトルを手にしたのはクリアソン新宿！虎の子の1点を守り切る 第31回東京都サッカートーナメント



3大会ぶり2度目の優勝のクリアソン新宿

第31回東京都サッカートーナメント決勝は、5月9日、味の素フィールド西が丘で行われ、クリアソン新宿(JFL)が横河武蔵野FC(JFL)を1-0で破り、3大会ぶり2度目の優勝に輝き、東京都代表として天皇杯 JFA 第106回全日本サッカー選手権大会への出場権を獲得した。

主催：(公財) 東京都サッカー協会
日時：2026年5月9日(土)

共催：東京新聞、共同通信社
会場：味の素フィールド西が丘

特別協賛：(株) プロパティユース

チームとしての矢印を合わせた新宿が勝利

今大会のタイトルを勝ち取り、天皇杯本戦出場をつかんだクリアソン新宿の北嶋秀朗監督は「戦術的な部分というよりは、全員の矢印をそろえ、感情の矢印を一点に合わせるということだけに集中して、このゲームに臨みました。その矢印にパワーが向かったことが勝利につながったと思っています」と試合を振り返った。

社会人チームの対決は14年ぶり。同じJFLの舞台でしのぎを削るチーム同士の戦いは、強風のなかで始まった。

風上となった新宿が立ち上がりにボールを保持して主導権を握る。キックオフ直後に得たCKのこぼれ球をDF吉田将也が右足で狙うが、わずかにそれていく。16分には、MF村越健太がドリブルで運び、右サイドを駆け上がる吉田にボールを送り、グラウンダーのクロスを入れるなどチャンスをつくっていた。新宿は4バックだが、ビルドアップ時にはどちらかのサイドバックが高い位置へ上がり、後ろを3枚で回し、横河武蔵野FCの2トップに対して数的優位をつくる。サイドを引き出し、そのスペースを突くことでボールを前進させた。

「今シーズンは、先制されて残り10分で追いつく試合が多く、そのパワーを1分目から出そうということで『15分までに点を取る、それがかなわないならシュートを3本打つ』ことを選手と約束して、意図的に大きな矢印を立ち上がりにもっていった」(北嶋監督)。

そのなか、21分に試合が動く。GK浅沼優瑠から敵陣深くを狙ったロングキックのセカンドボール争いでFKを獲得。キッカーのMF島田譲がペナルティエリア内の左へ落としたボールを、走り込んだDF沼田圭悟が左足で合わせると、相手DFの体に当たり、ゴールネットに吸い込まれた。

「僕の特長やタイミングを分かって蹴ってくれたので、ゴールにつながって良かったです。これは練習の賜物だと思っていますし、スタッフも僕を信じて起用し続けてくれた。その想いに応えられて良かったと思っています」と沼田は振り返った。

新宿が1点をリードしたまま後半を迎えるが、風下となり、セットプレーやロングスローからピンチを迎える。47分には横河武蔵野がロングスローからフィニッシュシーンをつくったが、浅沼が阻んでみせる。56分にはロングボールの折り返しを受けたFW宮田和純がシュートを放つ。ボールは新宿のDF陣に当たって軌道が変わ



ゴールに迫る新宿の村越健太選手

試合結果

横河武蔵野FC 0-1 クリアソン新宿

0 (前半) 1
0 (後半) 0

得点者：21分 オウンゴール

り、ゴールポストをたたくなど、横河武蔵野の圧力を受け、我慢の時間が続いた。反撃に出たい新宿は65分、MF澤井直人のスルーパスから村越がクロスを入れ、吉田が右足でゴールを狙ったが、GK末次敦貴に左足でブロックされ、追加点を奪えない。

北嶋監督は勝利へのベクトルを「得点を取る」から「守り切る」にシフトチェンジ。途中出場の選手を含め、「相手にロングボールを蹴らせない、きれいなボールを蹴らせないようプレッシャーをかけ続け、蹴られたらダッシュで戻ること」を徹底させた。新宿の選手たちは最後まで体を張り続け、ゴールを守り、試合はそのまま1-0でタイムアップとなった。

攻守でチームをけん引し、3大会ぶり2度目の優勝を手繰り寄せた主将の島田は「このタイトルは大きな目標として掲げていたので本当にうれしいです。勝っても負けても応援してくれる皆さんに、この優勝を喜んでもらえたことが何よりもうれしいです」と感謝の言葉を述べた。

横河武蔵野は決め切る精度が足りず、1点差に泣く

1点差に泣いた金守貴紀監督は「本当に悔しいということしかありません。後半にチャンスをつくれたなかで、点を取り切れなかったところが、まだまだ自分たちの力不足かなと思っています」と肩を落とした。

試合前から吹く強風の影響もあり、前半は風下を選択し、「しっかり守り切って後半に勝負に出る」プランで臨んだが、FKから失点。その後は両サイドハーフを前に押し出してペースをつかんだが、相手のゴールネットを揺らせなかった。

主将のDF山田梨功は「僕らが悪かったというゲームではないが、相手の最初のチャンスを守り切れなかった弱さは課題」と口にし、「終わったことは取り返せないで、次に結果を出してサポーターに良い報告をしたいです」と、さらなる活躍を誓った。



仕掛ける横河武蔵野の平野右京選手

成年女子が本大会出場を決める

第80回国民スポーツ大会関東ブロック大会

第80回国民スポーツ大会関東ブロック大会が千葉県（千葉市・市原市）で行われた。少年男子、少年女子、成年女子のカテゴリーが開催され、東京都代表では成年女子が10月に青森県で開催される「青の煌めきあおもり国スポ・障スポ」への出場を決めた。

主催：(公財)日本スポーツ協会、千葉県・群馬県・山梨県・埼玉県・東京都・栃木県・神奈川県、茨城県教育委員会、関東ブロック各都県スポーツ協会、(一社)関東サッカー協会、千葉市・市原市
日時：2026年6月27日（土）、28日（日） 会場：フクダ電子アリーナ、ゼットエーオリプリスタジアム、高円宮記念JFA夢フィールド、千葉県フットボールセンター

成年女子



PK戦を制して本大会出場を決めた成年女子

気持ちの強さがこのチームの武器

成年女子は強豪・山梨県と戦い、70分間では決着がつかず、PK戦へとつれ込んだが、PK戦を制して本大会への出場を決めた。「PK戦までいきましたが、勝てて良かった。選手たちはピッチ状況にも柔軟に対応してくれましたし、シンプルに相手陣内でプレーすること、ボールを蹴らせないように前線からしっかり守備をすることを徹底してやってくれたと思います」と大槻茂久監督は振り返った。

台風の接近に伴い、激しい雨が降り続くなか、試合開始のホイッスルは鳴った。序盤は、左右からのクロスで山梨県を揺さぶると、27分には主将のFW野村亜未（慶應義塾体育会サッカー部女子）が右サイドの角度のない位置からシュートを放ったが、相手GKにセーブされる。30分、ゴール前のこぼれ球に詰めたMF木田遙（慶應義塾体育会サッカー部女子）もシュートを放るが、DFに阻まれる。それでも持ち味である右サイドからのスピードを生かした攻撃で、相手ゴールへ迫っていく。しかし、ゴール前まで攻め込みな

がらもあと一步のところまで得点には届かず、もどかしい時間が続いた。

スコアレスのままハーフタイムを迎え、後半に入ると、チームが間延びしたことでセカンドボールを拾われ、山梨県にチャンスを作られるが、GK田村亜沙美（早稲田大学ア式蹴球部女子）が味方に声を掛け続ける。「苦しい時間も続きましたが、全員で守り切ろうと思っていました」。

チームで戦い、ミス全員でカバーする。絶対に負けないという強い気持ちを前面に押し出して戦い、互いに一步も譲らぬ激闘は0-0のまま決着がつかず、勝負はPK戦へ。先攻の山梨県の1人目が成功すると、対する東京都は1人目のキックがストップされる。そして両チームの2人目が成功し、続く3人目は両者とも決め切れず、山梨県の4人目と5人目を田村が意地のPKストップで防ぎ、流れを呼び込んだ。「ぎりぎりまで動かずに、相手の状況を見てセーブすることを意識した」と田村。最後は東京都の5人目、DF杉山遥菜（早稲田大学ア式蹴球部女子）が冷静に決め、PK戦を3-2で制し、雨中決戦に勝利した。



PK戦で勝利した瞬間

大槻監督は「良い準備をし、それぞれが向上心を持ちながら取り組んでいけたらと思っています。本大会では良い成績を残せると期待しています」と話す。そして野村は「全員の力を合わせ、優勝を目指して頑張りたいと思います」と意気込んだ。

2019年（茨城国体）以来の本大会出場となる成年女子チームには、少年男子と少年女子の思いを背負い、本大会での活躍が期待される。

試合結果

山梨県 0-0 東京都
PK2-3

少年男子



ゴールに何度も迫るも得点が奪えなかった少年男子

雨中の反撃実らず、惜しくも本大会出場ならず

少年男子は神奈川県との代表決定戦に臨んだが、0-1で敗れ、本大会出場はかなわなかった。昨年、日本一に輝いた東京都だが、今年は関東ブロック大会で惜しくも涙をのんだ。雨の影響で難しいピッチコンディションとなった一戦では、前半にセカンドボールや切り替えて相手に後れを取り、クロスから先制点を献上。それでも後半は修正を施して反撃に転じ、FW松下晴城（FC東京U-18）らを中心に何度もゴールへ迫ったが、相手GKの好守にも阻まれ、最後までゴールネットを揺らせなかった。

岩永雄太監督は「後半は選手たちが修正して、本当にいいチャンスをつくってくれた。ただ、ラストパスやシュートの質が足りなかった」と試合を振り返った。主将を務めたDFオドエメナム太羅（三菱養和サッカークラブユース）も「前回大会で優勝していたので、東京都としても一回全国まで行って優勝したかった」と悔しさをにじませたが、東京選抜で過ごした時間を「自分にとって成長につながった」と受け止める。「この活動で得た経験を、自分のチームでも生かしていきたい」。岩永監督も「ここまでの活動で成長した選手はたくさんいる。この悔しさを今後の活躍につなげてほしい」と選手たちにエールを送った。

試合結果

東京都 0-1 神奈川県

得点者：21分 沢口栄太（神奈川県）

少年女子



一丸となって戦うも1点が遠かった少年女子

悪天候のなか、最後まで体を張ってプレー

少年女子は、2年連続での本大会出場を目指したが、千葉県に0-1で敗れた。台風の影響でピッチには、ところどころ雨水がたまる環境の中でスタート。普段なら通るはずのパスが止まってしまう、ボール保持を強みとする東京都は苦戦を強いられる。

前半は相手に押されながらもGK楠紗来（ノジマステラ神奈川相模原ドゥーエ）を中心に体を張って耐えていたが、29分、CKのこぼれ球を押し込まれて失点。後半は相手の背後をシンプルに狙ってチャンスを増やし、シュートシーンをつくった。66分にはDF田中風沙（十文字高校）がロングシュートを放ったが、惜しくも得点には結びつかず、その後も試合終了のホイッスルが吹かれるまで、諦めることなく何度もゴールに迫ったが、タイムアップとなった。さまざまなチームから選手が集まり、「日本一」という目標を立て、一丸となって戦ったが、あと一步届かなかった。

矢田貝実希子監督は「決め切ことは課題ですが、背後に抜けることを頑張ってくれました。チームは解散となりますが、それぞれの場所で頑張ってもらいたい」とエールを送ると、楠は「悔しい結果でした。ただ、出場できなかった仲間のために頑張れました」と前を向く。選手たちは、それぞれのチームへと戻り、この経験を生かしていく。

試合結果

東京都 0-1 千葉県

得点者：29分 角鹿紀南（千葉県）

町田から全国の頂点へ 勝利とフェアプレーでつかんだ日本一

JFA バーモントカップ 第36回全日本U-12フットサル選手権大会

東京都代表として全国の舞台に挑んだFC トリアネーロ町田が、「JFA バーモントカップ 第36回全日本U-12フットサル選手権大会」で、準決勝、決勝ともに苦しい展開を跳ね返し激闘の末に日本一の座をつかみ取り、悲願の全国制覇を達成。鴨川澄空選手がベストプレーヤー賞に輝き、チームも2年連続でフェアプレー賞を受賞するなど、町田の子どもたちが全国の舞台で大きな輝きを放った。



初優勝のFCトリアネーロ町田

2点差を跳ね返し、2年連続の決勝へ

8月11日、駒沢オリンピック公園総合運動場で「JFA バーモントカップ 第36回全日本U-12フットサル選手権大会」の準決勝、決勝が行われ、東京都代表のFCトリアネーロ町田が全国の頂点に立った。

準決勝の相手は愛知県代表のプリンカールFC。開始2分、4分と立て続けにゴールを許し、いきなり2点を追う苦しい展開となった。それでもトリアネーロ町田は慌てない。5分に鴨川澄空が1点を返すと、7分には菅野真之介が決めて2-2。第1ピリオドのうちに試合を振り出しに戻した。

第2ピリオドも攻守の切り替えを速めながら相手ゴールへ迫り、18分に田島伊織がついに勝ち越し。さらに19分には鴨川がこの試合2点目を奪い、4-2で逆転勝利。序盤の劣勢を跳ね返す精神力と勝負強さを見せ、2年連続となる決勝進出を果たした。



ゴールを守り続けた西村俊亮選手

援席もヒートアップし、会場は熱い声援に包まれた。

そして19分、勝負を決めたのは鴨川だった。田島のシュートのこぼれ球に反応し、左サイド深くからゴール前へ強いボールを送り込むと、これがネットを揺らして6-5。残り時間はGK西村俊亮を中心に全員で相手の猛攻をしのぎ切った。



優勝を決めた歓喜の瞬間



決勝戦で3得点決めた荻野啓介選手

悲願の全国制覇と2年連続フェアプレー賞を受賞

前回大会は決勝で涙をのんだトリアネーロ町田。その悔しさを力に変え、念願叶っての日本一をつかみ取った。さらに決勝で2得点を挙げるなど優勝に貢献した鴨川が大会のベストプレーヤー賞を受賞。チームには2年連続となるフェアプレー賞も贈られた。勝負強さだけでなく、フェアプレーの精神でも高い評価を受け、トリアネーロ町田の選手たちにとって大きな実りを手にした全国大会となった。



ベストプレーヤー賞の鴨川澄空選手

点の取り合いとなった決勝、土壇場でつかんだ日本一

決勝では神奈川県代表のFCボルタと対戦。開始早々から激しい点の取り合いとなった。1分に先制を許すも鴨川がすぐさま同点弾。再びリードされても荻野啓介が追いつき、さらに失点した直後には阿部綺翔が決め、第1ピリオドを3-3で折り返した。

後半も一進一退の攻防が続く。荻野が14分、15分と立て続けにゴールを奪う一方、FCボルタも譲らず、スコアは5-5。全国制覇の行方は最後まで分からない大熱戦となった。関東勢対決ということもあり、両チームの応

TOPICS

3月22日(日)
JFA

第31回全日本フットサル選手権大会

優勝・ASVPESCADOLA町田

ベスカドーラ町田が10年ぶり3度目の頂点に立った。決勝ではバルドラール浦安に2点を先行されながら追いつき、延長でも決着せずPK戦へ。GKビゴージが3本を阻止する活躍を見せ、激闘を制して悲願のタイトルを手にした。

5月24日(日)
JFA

第26回全日本O-60サッカー大会

優勝・T.Dreams60

T.Dreams60は、1次ラウンドを3連勝で突破し、準決勝ではFC浦和シニア60に2-0で勝利。決勝は横須賀アスール60と対戦。終了間際にPKで失点したものの、すぐに同点に追いつく劇的な展開から、PK戦を制して2年振りの栄冠を手にした。

5月24日(日)
JFA

第20回全日本O-70サッカー大会

優勝・FC CERRO

FC CERROが悲願の初優勝を飾った。1次ラウンドを8得点無失点で、3戦全勝で突破。準決勝では埼玉シニア70を1-0で下し、決勝では静岡県選抜O-70に3-1で勝利。攻守にわたる安定した戦いで、見事日本一に輝いた。

7月26日(日)
JFA

第13回全日本U-18フットサル選手権大会

優勝・フウガドールすみだファルコンズ

フウガドールすみだファルコンズが、前人未踏の4連覇を達成した。1次ラウンドを3戦全勝で突破し、決勝ではバルドラール浦安テルセーロを4-3で下して優勝。U-18年代の頂点に立ち、圧倒的な強さとチーム力を示した。



世界最高峰で得た確信、次なる目標は 2030 年W杯 荒木友輔サッカー国際審判員インタビュー

Jリーグをはじめ、W杯アジア予選プレーオフなど、国内外の大舞台を担当してきた荒木友輔審判員。2025年にはJリーグ最優秀主審賞を受賞するなど評価を高め、念願だったFIFAワールドカップ審判員の切符をつかんだ。FIFAワールドカップ2026では、第4の審判員として6試合を担当。主審として笛を吹く機会は訪れなかったものの、選手交代の提示などを通じて主審をサポートし、世界最高峰の舞台で貴重な経験を積んだ。

すでに視線は次のW杯へと向っている。「僕が活躍することで、サッカーや審判員に興味を持つ人が増えてくれれば」世界のトップレベルを肌で感じた荒木審判員に、W杯で得た経験や日本の審判員の可能性、そして2030年に向けた思いを聞いた。



ロサンゼルス・スタジアム



試合前のロッカールームにて

選手やベンチを上回る熱量をピッチで示す

——改めてFIFAワールドカップ2026の主審52人のひとりとして選出されました。率直な感想を教えてください。

自分を含め、三原純副審と共に選出されて良かったといううれしい気持ちと、これまで日本の審判員が継続してW杯に参加していたので、それを途切れさせなくて良かったという安堵の気持ちがありました。日本や各国の審判員や協会の方々からも『おめでとう』という連絡をもらい、ありがたい気持ちになりました。

——アメリカに渡ってからのスケジュールなどを教えてください。

10日間ほど、事前の研修がありました。ルール改正の確認や、目の前で起こる細かな事象への対応など、レフェリングに関わるさまざまな内容です。例えば、パニシングプレーの引き方にも共通ルールがあり、練習で全員統一させられました。綿密に計画された研修を受けました。

大まかに言えば、午前はFIFAのインストラクターが作成したプラクティカルトレーニング（試合形式）で、スローインのカウンタダウンやゴールキックのカウンタダウンの事象をどう対処するかの練習。午後は研修会などを行っていました。ちなみに、審判員はホテルからトレーニング場まで高速道路を使って約40分かけて通うのですが、毎日道路が封鎖されていて、渋滞を味わうこともありませんでした。アメリカってすごいなと感じましたね（笑）。



トレーニング中

——試合の割当が決まるまでの流れを教えてください。

割当が決まるのは3日前ぐらいでした。割当が入りそうなメンバーは個別のプログラムになり、運動量をコントロールします。試合がある審判、試合がない審判、試合から戻ってきた審判でメニューが異なり、その3つに分かれていました。また、食事はFIFAから派遣されたシェフが提供してくれました。

——W杯の期間中は他国の審判員とも交流があったと思います。どのようなコミュニケーションを取っていましたか。また、トップレベルの審判員と接することで刺激を受けたことや、学んだことはありますか？

試合の翌日には参加している審判員全員で公式なディブリーフィングがあり、その中で起こった事象の改善点などを話すのですが、それだけに限らず、食事の時間などでも事象に関して仲間の審判員で話をしたりしていました。

大会を通じて、『試合をコントロールする』ことを強く表現する審判員や、リーダーシップを持って笛を吹く審判員が多いと感じました。トップレベルであればあるほどゲームの読みが鋭く、どこで問題が起こりそうなのかを察知する力が高い。また、間髪を入れず自分から選手に話しかける姿勢

や危機察知能力も、トップレベルの審判員は優れていると感じました。

90分間、無事にゲームを引っ張っていくことが審判にとって最も重要だと、つくづく感じたW杯でした。選手やベンチの熱量を上回るエネルギーを表現しながら対応していくことが大事だと思いました。

最後まで諦めないことで違う世界が見える

——改めて、日本のレフェリング技術は世界に引けを取らないと感じられましたか？

J1を担当するトップレベルの審判員であれば、間違いなく世界のトップでできる。それは今回のW杯で自信になりましたし、安定感では日本人審判員のほうが優れていると感じる部分もありました。



試合前のミーティング

——これからの目標について教えてください。

FIFAワールドカップ2030で笛を吹くこと。その目標は明確です。今大会では笛を吹くことができませんでしたが、次はラウンド16以上を担当できるようにしたい。目標は次のW杯です。

——最後に、審判員を目指す方にメッセージをお願いします。

東京都の審判システムは本当によくできていると思いますし、この流れに従っていけばトップレベルまでいけると、僕は自信を持って言えます。最後まで諦めないことで必ず違う世界が見えてくるので、レベルアップし続けてほしいと思っています。

PROFILE

荒木友輔（あき ゆうすけ）

1986年、東京都青梅市出身。北多摩高校、法政大学卒業。2011年に1級審判員を取得し、2016年からJ1リーグで主審を務める。2017年に国際主審に登録され、翌年からプロフェッショナルレフェリーとして活動。2025年にJリーグ最優秀主審賞を受賞した。W杯アジア予選プレーオフやAFCチャンピオンズリーグなど国際舞台でも経験を重ね、2026年にFIFAワールドカップ2026の審判員に選出された。

東京都フットサルユース審判員育成プロジェクト 実戦を通じて若手審判員の成長を後押し

東京都サッカー協会審判委員会は8月5日、6日の2日間、京王アリーナTOKYOで「ネクストジェネレーション研修会」を実施した。中高生のユース審判員が小学生の大会で主審、第2審判、タイムキーパーを務め、経験豊富な審判員から直接指導を受けながら実戦経験を積んだ。



対面でのシグナルチェック



試合中の様子



タッチラインの近くでボールイン・アウトの確認

4級審判員が実戦経験を積む貴重な機会

8月5日と6日の2日間、京王アリーナTOKYOでネクストジェネレーション研修会が実施された。近年、人手不足になっている中高生のユース審判員が、小学生の大会である「第4回TFFフェスティバルU12選抜招待大会」「第2回TFFフェスティバルU10選抜招待大会」で主審、第2審判、タイムキーパーのすべてを担当し、実地研修を積むものだ。3級以上の審判資格が要求される大会が多いなか、4級審判員が担当できる場を用意し、東京都サッカー協会審判委員会の役員かつ、上級審判員資格者が経験の浅い審判員を直接指導できる点が特徴で、ユース審判員の発掘育成と審判員の質・量を向上させる起爆剤としての意味合いがある。

「シャドー」がユース審判員を直接指導

招待大会ということで、参加チームは審判育成を目的とした大会運営を容認。普段は競技者としてプレーしている、審判未経験、上級者を目指したいと考えているユース審判員など、各日24名が参加し、試合の審判活動だけでなく、1日目はピッチやピッチ周辺設営、各試合のミーティングやマッチコーディネーションミーティングへの出席、2日目は撤収作業も体験した。ミーティングでは何を話せばよいかわからない参加者もいたので、基本的な流れなどが丁寧に説明をされた。「笛」の研修では、試合開始の重要な笛を強く吹くことを意識して参加者全員が本番で実践。2人組の対面での「シグナル」チェックや「ボールイン・アウト」は、ポジショニングの違いで見え方が違うことを実際に確認しタッチラインの近くに位置する意味



シャドー役は国際審判員の山本さんが務めて、指導した

を理解してもらうなど、おもしろさや楽しさをもってもらうことを念頭に置いた内容が組まれていた。フットサル国際審判員の山本真理さんらが「シャドー」としてユース審判員に付き添う、異例の光景が繰り返された。シャドーとは、審判員のすぐそばに経験豊富な審判員や指導者が付き添い、適宜アドバイスを送るもの。また、試合後にはミーティングを行い、そのフィードバックによってレフェリングへの理解を深めた。普段のユースリーグでは、大人が主審を務め、ユース審判員が第2審判を担当する形で育成を図っているが、それを一歩進めた試みとなった。

若手審判員の裾野を広げ、国際舞台へ

現状、ユース審判員がすべてを担う大会はこのプロジェクトだけ。今回の試みを最初の第一歩として波紋を広げ、今後は若年層の大会において、上級資格を持つユース審判員を増やし、更には国際舞台へ送り込むことが大きな目標となる。1日目にはJFA審判委員会審判マネージャーの延本泰一さんも来場して指導。持てるリソースを最大限に投入した環境で、ほぼ未経験の審判員を成長させ、その可能性を引き出すことを狙った。今後も同様のプロジェクトを繰り返し実施することで、審判員の裾野を広げ、その層を厚くしたいところだ。



参加者と上級審判員らとの集合写真(8月6日)

COMMENT



決勝を担当した松本さん

決勝戦主審 松本 花さん (中学3年生)

今回は2日間で、決勝戦の主審を含む4試合を担当しました。ファウルの判断に迷いが生じるなど、自分に足りないことの多さに気づきました。今後についてはまだ目標が決まっていますが、まずは目の前の試合でしっかり判定できるよう、ルールを完璧に把握したいです。また、選手として試合に出たときにも、審判のことを考えていきたいと思っています。

東京都フットサル連盟 ユースリーグ審判統括 毛利明博さん

選手として行き詰まりを感じた人が審判の世界をのぞけるように、適切な環境をつくっておくことは有効だと感じました。ユースリーグの各チームも審判に対して真剣に取り組んでくれるようになってきました。今回も前向きな感想が多く、審判委員会とユースリーグのコラボが奏功してよかったと思います。今後も裾野の拡大に目を向けていきたいです。



毛利さん(左)と川村さん(右)

東京都サッカー協会 審判委員会 フットサル・ビーチサッカー部 フットサル1級審判員 川村勝治さん

若い人たちはスポンジのように吸収力が高く、アドバイスを聞いて真摯に向き合ってくれます。初めてのことで何が起こっても仕方ないと思っていましたが、開催してよかったです。今回のミッションは楽しく審判をして「またやりたい」と思ってもらったことでした。そのミッションが達成できましたので、次は彼らに活動の場を用意し、上級へのステップをつくっていきたいです。



サッカーLIFE

～サッカーファミリーのサッカーライフを紹介～

たくさんの人に支えられている TOKYO FOOTBALL

どのような人がどのように関わっているのか知ってもらいたい そんな思いから生まれました

サッカーライフ 伊藤勝敏さん（立川アスレティックFC チームドクター）

お仕事 Q&A

今、活動しているチームは？

チームドクターとして、フットサルでは立川アスレティックFC、そして武蔵大学、玉川大学のアメリカンフットボール部に所属し、東京都サッカー協会が主管する大会にも参加させてもらっています。普段は、横浜つづき整形外科院長をしています。



試合前のコンディションチェック

月にどれくらい活動を？

秋から春にかけてが多く、ほぼ毎週ですね。1年を通してみれば、月に2、3回程度というところです。

立川アスレティックのチームドクターになった経緯は？

15年ほど前のことですが、フィールドケア21（スポーツ医学の研究会）でお声がけいただいたことがきっかけです。他の3、4人のドクターと一緒にチームを見えています。ホーム開催時には必ずドクターがいることが規定にあり、安心して開催することにつながっていると思います。会場ドクター兼チームドクターという役割を担っています。

スタッフや選手とはどのような連携を？

チームのトレーナーと密に連絡を取り合い、選手の状況を把握しています。

やりがいを感じる瞬間は？

ケガをした選手が復帰して頑張ってくれている姿を見るときですね。それが一番です。例えば骨折なら2、3カ月間フォローをし、明確にゴールを設定するなど、選手のモチベーションが下がらないよう意識しています。



スタッフと情報共有

注意していることは？

選手を焦らせないことが大事だと思っています。焦っている選手にはブレーキをかけ、時には厳しく伝えることもあります。また、一つひとつのステップを踏めるよう、言葉の選び方にも注意を払っています。

魅力や、やりがいを感じる瞬間は？

スポーツのリアルを体験できる楽しい現場にいられること。選手がケガをしてしまったら自分の番になりますが、ケガがないことが一番。私が試合をのんびり見ていられることが、一番良いことだと思っています。

プライベート Q&A

サッカーやフットサルをプレーした経験は？

サッカーやフットサルの経験は全くありません。大学時代はテニス部で、チームプレーには慣れますね（笑）。

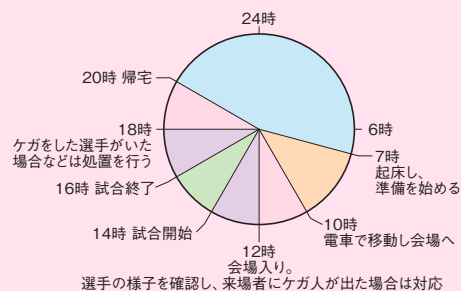
整形医学のドクターになったのは？

スポーツが好きだったことに尽きます。

現在、保持している資格は？

日本整形外科学会認定専門医、リウマチ医、リハビリテーション関連の資格を取得しています。まったく関係のないところでは、チョコレート検定エキスパート（株式会社明治）という資格も持っています（笑）。あとはロシア語検定4級です。

試合日のスケジュールは？



休日の過ごし方は？

美術館巡りや御朱印巡りをしています。御朱印帳は今、8冊ほどたまりました。

ご自身にとってサッカー、フットサルとは？

選手には楽しくプレーしてほしいですし、見ている方にとっては真剣でひたむきなプレーに感動を覚えるものです。私にとってフットボールはライフワークだと思っています。

サッカー観戦には？

鹿島アントラーズが好きで、自宅近くで横浜F・マリノス戦がある時には応援に出かけます。きっかけは、サッカーの神様と言われたジーコがプレーしていたことや、大学3年時にJリーグが開幕し、鹿島対ガンバ大阪戦を生で観戦したことです。以前の勤務先がカシマスタジアム（現・メルカリスタジアム）の近くだったこともあり、応援しているうちにどんどん愛着が湧いてきました。

メッセージ

サッカーは「見るのも、プレーするのも楽しいスポーツ」です。ぜひのめり込んで楽しんでいただき、もしケガをしてしまった場合には、私たちドクターがいますので安心してプレーしてほしいです。また、スポーツの醍醐味を体験できる仕事なので、ぜひ多くの方に興味を持っていただきたいです。



From the Association

6月24日に開催された定時評議員会ならびに理事会において、2026年度・2027年度の役員が選出され、新たな役員体制がスタートいたしました。引き続き、会長をはじめとする役員一同、それぞれの役割と責任を果たしながら、東京のサッカー環境のさらなる充実と発展を目指し、一つひとつの課題に真摯に向き合い、全力で取り組んでまいります。

今後とも、皆様のご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

2026年度・2027年度役員一覧



理事（18名）	
会 長	植田 昌利
副 会 長	漆間 信吾
	木下 由美子
専務理事	猪鼻 剛
常務理事	末永 孝彦
理 事	河野 正人
	赤星 真一
	長山 拓郎
	西野 泰啓
	艸川 幸治
	松村 俊英
	前田 光洋
	松村 栄寿
	蒲澤 淳一
	小佐野 貴子
	江川 純子
	深野 悦子
	中山 千恵美

監事（2名）	
福田 雅	金子 哲郎
特任理事（6名）	
児玉 健生	齊藤 功
間中 敏之	萩原 智博
山藤 賢	平野 正義

新理事 就任の挨拶

長山 拓郎 理事

社会やスポーツ界を取り巻く環境が変化し、サッカー界も未来を見据えた変革を求められています。高校年代の選手達がこれからもサッカーを通して輝けるよう、様々な課題に向き合っていきます。東京から多くの優秀な選手が輩出され、サッカーを支え楽しむ人々がたくさん生まれるよう、微力ながら尽力させていただきます。

西野 泰啓 理事

未来の日本サッカーは、今日の育成現場から始まります。所属や立場の垣根を越え、すべての選手が夢を諦めず挑戦できる環境をつくる。守るべきものは守り、変えるべきものは恐れず変える。勝利だけではなく、挑戦する力、仲間を想う心、社会で生き抜く力を育む。それが育成年代の使命です。東京から世界へ、そして未来へ。子どもたちの可能性に大人が本気で責任を持ち、東京の育成をさらに前へ進める覚悟で挑み続けます。

松村 俊英 理事

東京FAの多大なるご支援をいただきまして4種少年少女の普及・育成活動に全力で取り組みます。男子だけでなく女子U-11・U-12年代の地域交流を始め育成強化とし、また、なでしこ広場を活用して普及にも力を入れてすそ野を広げていきます。選手、チーム関係者、保護者、そして少年連盟が一つの輪となり4種年代の発展につながると信じて推し進めます。

前田 光洋 理事

ものすごいスピードで時間が経っています。私が初めてサッカーに関わって既に50年以上の年月が経ちました。当時サッカーは私の周りでは決してメジャーなスポーツでもなく、競技環境も十分に整っていなかったと記憶していますが、半世紀たち今はこのような状況にあります。これがこの後あつという間に訪れるであろう50年後、100年後はどうなっているのでしょうか。あとの時代の方から栄枯盛衰などと言われたいようしっかり根を張った取り組み、活動の一助となれば幸甚に存じます。

間中 敏之 特任理事

33年間、東京FAの理事、特任理事を務めていただきました専門学校サッカー連盟横山さんより重責を引き継ぎました。専門学校サッカー連盟は、プロを目指している選手からここでサッカー人生をスタートさせた選手まで、多岐にわたります。他連盟の方々と連携を取らせていただきながら、安全で公平な環境でサッカーが楽しめるよう、微力ながら任務を全うして参ります。よろしくお願いいたします。

新技術委員長に漆間 信吾副会長が就任

このたび、東京都サッカー協会の技術委員長を務めさせていただくことになりました。前技術委員長よりバトンを引き継ぎ、東京都のサッカーの発展に携わっていきたいと思います。大変光栄に感じるとともに、責任の重大さも実感しています。

私自身、トレセン活動・指導者養成・国体（現国スポ）等に関わってきましたが、これまで多くの方々のご尽力によって築きあげてこられた成果には、心より敬意と感謝を申し上げます。

技術委員会は主に育成部・指導部・強化部の三部から成り、この三部で連携を取りながら全体の活動指針を決めていきます。

育成部では、トレセン活動を通じて、選手ひとりひとりが持っている可能性を最大限に引き出し、各カテゴリーを通じた継続的な選手育成を図りたいと思います。その中で、特に「個」を大切に育成が重要と考えます。

指導部では、指導者の資質向上と指導者講習会をより受講しやすくしたいと思います。東京都には40名を超えるチューターがいますので、それも可能であると考えています。

強化部では、国スポに向けた活動を通じて選手の強化を図ります。少年男子・女子、成年男子・女子の各カテゴリーで結果だけでなく、東京都選抜という誇りも持ってチャレンジしていく姿勢も大切にしていきます。

東京都はキッズ世代からシニア世代まで首都東京として多くの個人、チーム登録者がいます。またサッカーをするのに欠かせない審判員、大会関係者等含めてサッカーファミリーの存在もとても大きなものです。その中から、ワールドカップの日本代表に一人でも多くの東京都育ちの選手が選ばれて欲しいです。

最後に選手の競技力向上は勿論のことですが、子供たちのサッカーとの出会い、そこでの楽しみ、生涯にわたってサッカーを楽しむ環境を作っていくことを、東京都のサッカーに関わる全ての方々で協力しながら目指したいと思います。何とぞよろしくお願いいたします。





世界を見据え、未来へつなぐ少年サッカー

東京都少年サッカー連盟には現在、809チーム・42,486名の選手が登録されています。多くのスポンサーの皆さまに支えられながら、リーグ戦や少年連盟主催の各学年の大会を開催し、子どもたちの成長を後押ししています。

年間を通したリーグ戦では、1～3部で構成されるトップリーグ60チームに加え、1～16の各ブロックリーグの参加チームを含む759チームが、数多くの試合を重ね、選手の育成につなげていきます。

6月に開催した「ハトマーク・フェアプレーカップ東京都U-10中央大会」では、今年度もアーカイブ映像を配信しました。少年連盟公式YouTubeチャンネルには63,000回を超えるアクセスがあり、視聴者数は年々大きく伸びています。

育成事業では、東京都選抜U-12男子・女子ともに海外遠征を実施しています。男子選抜は昨年引き続き、オランダ・ストフンで開催される「Seesing Flexx U13トーナメント」へ参加し、強豪クラブが集う大会で、見事準優勝という成績を収めました。チェルシー、レバークーゼン、アヤックスなど、世界のトップクラブとの真剣勝負を通じて、ヨーロッパの同年代選手のサッカーインテリジェンスやテクニック、強度を体感することは、参加選手にとって「世界基準」を身につける貴重な機会となります。

女子選抜は、昨年同様「USA CUP」に参加し、一つ上のカテゴリーであるU-13で堂々と戦い抜き、こちらも準優勝という素晴らしい結果を残しました。世界基準のプレーを肌で感じるとともに、この年代における自分自身の立ち位置を客観的に把握し、技術・判断・フィジカル・試合運びなど、多くの面でさらに成長が必要であることを実感しました。この経験をさらなるレベルアップにつなげ、競技力の向上だけでなく、世界を目標に挑戦する意識をより強く持つきっかけとなることを願っています。

普及活動では、各ブロックの担当で組織する普及部会で協議を重ねながら、低学年向けのサッカーフェスティバルなど多彩なイベントを展開しています。特に女子の普及・育成に力を入れており、今年度は「東京都女子ブロック交流会」をU-12・U-11それぞれで開催します。

少年連盟は、これからも「安心・安全」な事業運営を大切にしながら、

- ①夏の酷暑対策として、2027年度からリーグ戦を秋スタートに移行する日程の見直し
 - ②人工芝グラウンドなど、環境が整備された試合会場の確保
 - ③普及・育成事業を通じたサッカーファミリーの拡大
 - ④女子選手・女性指導者・審判員・ユース審判員の育成
 - ⑤ウェルフェアオフィサー講習会等による暴言・暴力の根絶
- といったさまざまな課題に取り組み、少年サッカーのさらなる発展に努めてまいります。

オフィシャルサイト

<https://www.jfa-tokyo-fa-u12.online/>



東京都少年サッカー連盟

崎間 猛



東京選抜U-12男子オランダ遠征



東京選抜U-12女子アメリカ遠征

新たなスタートを迎えた中体連サッカー

今年度の第65回東京都中学校総合体育大会 兼 第79回東京都中学校サッカー選手権大会は、7月30日に決勝戦を迎えました。決勝戦の結果、修徳中学校が優勝、駒場東邦中学校が準優勝となりました。7月前半は比較的涼しい日が多く、各支部の予選も無事に実施することができました。一方で、後半は猛暑日が続き、選手の安全を第一に考えた暑熱対策が欠かせない大会となりました。運営面では、ハーフタイムの時間を少し延長し、前半・後半それぞれに2回ずつクーリングブレイクを設けるなど、選手たちが安心してプレーできる環境づくりに努めました。

今大会は、中体連サッカーにとって新たな一歩を踏み出す大会でもありました。これまでの公立中学校、私立中学校に加え、地域展開クラブも参加する大会となったからです。地域展開クラブは、他の中学校と同じように支部予選から出場し、勝ち上がってきました。また、審判をはじめとする大会運営にも積極的にご協力いただきました。今回は2チームの参加となりましたが、東京都全体では地域展開クラブの参加はまだ12チームにとどまっています。今後、こうしたチームの参加がさらに広がることで、中体連サッカーの新たな可能性が生まれ、さらなる発展につながることが期待されます。

6日間にわたる大会を通して、選手たちはそれぞれの力を発揮し、最後まで懸命にプレーしました。この大会が、参加した選手たちにとって心に残る経験となることを願っています。すべての中学生年代の選手たちが充実したサッカーライフを送ることができるよう、これからも中体連サッカー専門部として尽力してまいります。

オフィシャルサイト

<https://www.soccer-tokyoctr.jp/>



東京都中学校体育連盟 サッカー専門部

委員長

艸川 幸治



優勝 修徳中学校



決勝戦の様子①



決勝戦の様子② (PK戦、修徳中GKのストップシーン)

試合前に記念品の交換



台湾遠征スタッフ・選手全員での集合写真

2025年度1部リーグで優勝し関東女子フットサルリーグ昇格を決めた「ARSVITA LADIES」



2026年度足立区共同開催で行ったユニフォーム展示

朝日新聞は2026年度も 大学入試出題数



Tokyo FA News 2026 vol.43

発行元 (公財) 東京都サッカー協会

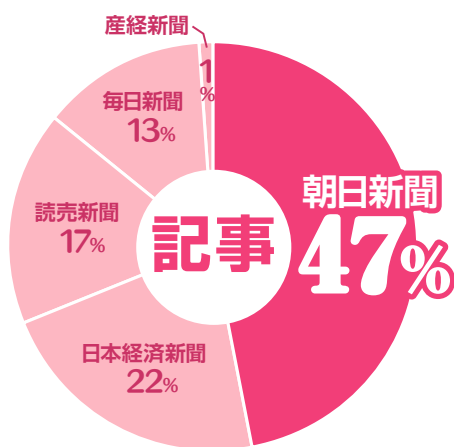
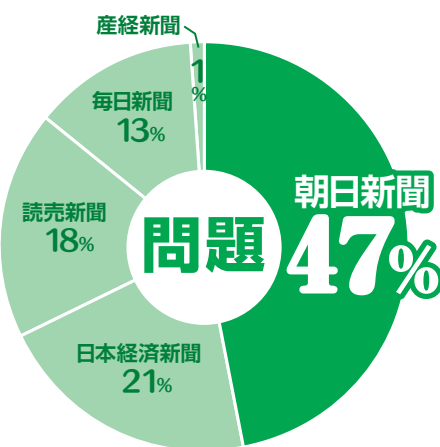
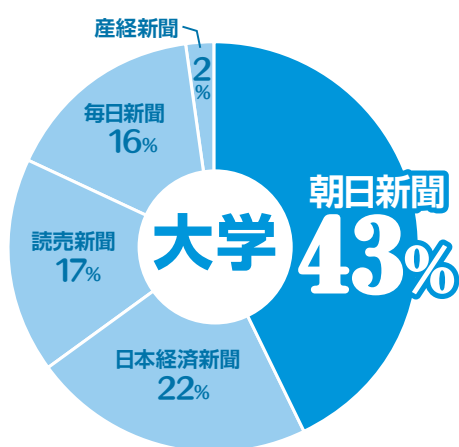
〒160-0013

東京都新宿区霞ヶ丘町10番1号 国立競技場内

TEL(03)6804-1301(代表)

令和8年9月30日発行

全国紙の2026年度大学入試出題実績



※大学通信調べ(2026年5月31日現在) 全国の大学にアンケート調査。
対象は読売新聞(読売新聞オンライン)、朝日新聞(紙面版・デジタル版)、
毎日新聞(毎日新聞デジタル)、日本経済新聞(日経電子版)、産経新聞
(産経ニュース)。回答数761。

朝日新聞

ご購入・お試し読み
受付時間 7:00~21:00

0120-33-0843

